

第34期第8回京都市社会教育委員会議の様を マナビがレポート！



令和3年6月18日（金）京都市総合教育センターで、第34期京都市社会教育委員会議の最終回 第8回会議が開催され、「第34期を振り返って、第35期に向けての提言」をテーマに議論がされました。会議の様をマナビがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち11名） ※五十音順

石川 一郎 委員，大澤 彰久 委員，櫻井 寿美 委員，園部 晋吾 委員，
廣岡 和晃 委員，本郷 真紹 委員，柁木 良子 委員，松岡 直子 委員，
森 清頭 委員，安成 哲三 委員，吉川左紀子 委員

第34期第8回社会教育委員会議 次第

1 議 事

（1）「第34期を振り返って、第35期に向けての提言」

- ①「学ぶ楽しさ」吉川議長 講話
- ②第34期の振り返り
- ③協議

（2）京都市基本計画「はばたけ未来へ！京プラン2025」について

2 報 告

「令和3年度指定都市社会教育委員連絡協議会（大阪市）」について

3 主催事業及び刊行物の案内

■ 挨拶（稲田教育長）

今期をもちまして、吉川議長、安成委員、大澤委員、松岡委員、櫻井委員、田村委員がご退任されます。それぞれの分野の第一線で御活躍の方々、豊富な知識と御経験をお持ちの先生方、また公募による熱意ある市民委員の方々など、幅広い分野から委員に御就任いただきました。皆様には大変お忙しい中、熱心な審議の中から、貴重な御意見・御提言をいただきましたことに、心から御礼を申し上げます。

とりわけ、吉川議長には、5期10年の長きにわたり委員を務めていただきました。心配りの行き届いた議事進行により会議を安定させるとともに、見識に富んだ数々の御意見をいただけてまいりました。また、本日は「学ぶ楽しさ」をテーマに講話をしていただけたことで、私も先生のお話から学ぶことを楽しみにしております。

また、安成委員にも4期8年にわたりお務めいただきました。地球規模のお話から地域に

根差したお話まで、幅広いご意見をいただきました。ありがとうございました。

本日は、議事テーマを『第34期の審議内容を振り返って、第35期に向けての提言』といたしました。今期では、本市基本計画『はばたけ未来へ！京（みやこ）プラン』の結びの2年ということで、計画の内容を踏まえ、社会教育・生涯学習の様々な施策について御議論いただけてまいりました。新型コロナの世界的な流行を受けて、これまでの私達の生活スタイルは大きく変容しております。とりわけ、世界的に見ても日本のICT活用が遅れていると言われていた中で、学校教育現場でのICT活用が、去年から一気に進みました。3月には京都市の小中学校全ての子ども達に1人1台タブレットを配布し、4月から本格的な活用が始まっております。特に障害のある子ども達、不登校の子ども達に、学習の可能性が広がっております。障害のある子ども達、例えば、まぶただけ、指先だけしか動かせない子どもも、タブレットのアプリを使って文章を書くことができるようになってきました。学習の可能性の広がりによって、子ども達の人権保障も広がればよいと思っていますところでは。

また、生涯学習の分野においてもWeb配信やオンライン講座が広がっています。この激動の2年間をふりかえり、今後も見据えながら、委員の皆様の専門性を生かした、多角的な視点からの御意見を期待しております。

人生100年時代と言われます。いつまでも健康でいきいきと生きていくことが大切です。本会議での御議論をもとに、「京都ならではの生涯学習」をより一層推進し、コロナ禍においても誰もが生涯を通じて学び続けることができ、その学んだことを生かし、生活の中で実践できるまちづくりを進めてまいりたい所存です。

本日のこの会議が実りあるものとなりますことを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

■ 議事（1）「第34期を振り返って、第35期に向けての提言」

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

それでは、第34期第8回社会教育委員会議を開催いたします。第34期の会議は本日で最終となります。

■ 講話「学ぶ楽しさ」

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

「学ぶ楽しさ」というタイトルで、お話をさせていただきます。このテーマを頂き、改めて私自身、今までどういう学びの中で楽しさを経験してきたかを振り返ってみました。

私は16歳まで北海道の勇払原野^{ゆうはつ}で育ちました。1954年の生まれです。父親が戦後間もなく関西から北海道に移り、製紙工場で仕事をしていた関係でそこで育ちました。冬には雪が積もり、5月になると庭が花でいっぱいになる、という環境でした。

その頃の学びの思い出は、母親が姉と私、ふたりに習わせたいということで始めたピアノです。子どもの頃のピアノのレッスンは、辛い練習の毎日でしたので、正直なところ学ぶ楽

しはあまりなかったと思います。年一度の発表会が大の苦手で、中学3年のときにやめることができ心からほっとしました（笑）。

高校の時に転校して東京に移りました。これは高校の同窓会の写真ですが、前列中央に、皆さんがよくご存じの方がいます。若かりし頃の安倍晋三さんです。成蹊高校3年E組で同級生でした。当時、安倍さんはどちらかというの内気な感じだったので、同級生は皆、安倍さんがまさか後年になって政治家になるとは、そして日本の総理大臣になるとは、夢にも思っていませんでした（笑）。



1973年に京都大学の文学部に入ったのですが、その頃ユング心理学の河合隼雄先生が教育学部で教えていました。大学で心理学に出会ったこと、そこで分野を超えた学びの楽しさを知ったことは、今から振り返ると、私にとってとても大きな出来事でした。臨床心理学、とくにユング心理学は新しい分野で、教室はいつも超満員、ポータブルのレコーダーを持って授業に来る方もいましたし、みんなワクワクしながら、河合先生の授業を聞いていた記憶があります。私も学部は違いましたが、いつもこっそり授業に潜り込んで聞いていました。アニマ、アニムスといった、ユング心理学の言葉を初めて知って、なんだかうれしかったですね（笑）。それから、後に京大の総長や国会図書館の館長もされた長尾真先生が、当時は京大の工学部電気工学教室におられました。長尾先生は、その頃「対話研究会」という文理融合の研究会を立ち上げ、教育学部の先生に声をかけて、院生であった私達も研究会に参加することになりました。こうした学際的な研究会は、今でこそ普通に行われていますが、1970年代の当時は非常に画期的なことでした。専門分野に閉じこもらないで、いろんな分野の人達と議論して学んでいく。それを工学部の教授だった長尾先生が率先して、文学部や教育学部の院生達に声をかけて、研究会をしていた。私が後になって、こころの未来研究センターで仕事をするようになったときに、異分野の人たちが集まる組織にまったく抵抗がなかったのも、こうした若い頃の学びの経験が大きかったと思います。心理学の新しい分野を学ぶ楽しさ、そして違う学部の人達と交流しながら学ぶ楽しさ、それが私の20代の頃に経験した「学ぶ楽しさ」です。

30代になると、心理学の研究職に就き、自分が学ぶだけでなく教える立場になりました。そして30代半ばにイギリスで1年間の研修の機会を与えられました。私が専門にしていた



た認知心理学は、その頃日本では、言語に関する研究がほとんどだったのですが、イギリスの研究者グループは、人の顔や表情といった、非言語情報の研究を始めていました。そこで私は「顔の認識」という面白いテーマに出会うことになりました。イギリスで1年間お世話になったのがヴィッキー・ブルースさんというノッテ

インガム大学の女性の研究者です。当時、日本では女性の研究者はまだ少なかったので、ブルースさんがバリバリ活躍している姿を間近に見ることは、私にとってとても勇気付けられる経験でした。これも楽しい学びだったと思います。ブルースさんは、当時、顔の認識モデルという理系的なモデルを考案し、論文で発表して話題になっていました。私は彼女が書いた著書『RECOGNISING FACES』を翻訳して出版し、顔の認識という研究分野があることを日本の心理学者に知らせることができました。それはとてもうれしい経験でした。

40代の頃は、心理学の世界が大きく変わり、脳科学が進展してその影響が広がってきた時期でした。顔の認識や顔の記憶について、私はそれまで実験室で行動実験をしていたのですが、脳科学を新たに学ぼうと思い、心理学と脳科学をどういう風に繋いでいくのがいいかを考えながら、勉強していくことになりました。理系の分野は得意ではなかったのですが、当時はそれほど楽しいとは思っていませんでしたが、自分の脳の活動の様子を画像化できる、fMRIという装置の中に入って、自分の脳の画像を研究材料にして論文を発表できたのは、ちょっとワクワクする、スリルのある経験でした。また、ブルース先生が日本に来られて、一緒に研究会をしたことも楽しかったですね。

その後、50代になった時には、当時京大総長だった尾池和夫先生を中心に、心についての新しい研究組織を作る話を進めて頂き、「こころの未来研究センター」ができて11年間センター長を務めました。脳科学や認知心理学、臨床心理学、宗教学などいろいろな分野の研究者が集まって、こころについて研究する場所です。小さな組織でしたが、年齢層も幅広く、男女の割合もバランスが取れている居心地のいいセンターでした。その中でいろいろな試みをしました。特に記憶に残っていることのひとつが、ブータン王国を5回程訪問し、現地の教育状況を見学する機会があったことです。当時、ブータンに関していろいろな書籍が出版され、国王が来日されるといったことが話題になりました。「日々、家族のことを考え、友人のことを考え、できることを精一杯し、それ以外はいろいろあるけれど、まあいいんじゃない？と気楽に捉える。そんな強さを彼らは持っています。」「これでいいのだと思う力。生真面目にならない。肩の力を抜く。そしてにっこり笑って、こうってみる。まずは自分に言ってみる。これでいいのだ、と。」これは、ブータンで1年間公務員をされていた御手洗瑞子みだらいたまごさんが書いている本の一節です。ブータンを訪問した私たちは、小学校の子ども達が、朝、元気にニコニコして、学校に駆け足で来る姿を目の当たりにし、学ぶ楽しさの原点を見たような気がしました。ブータンの子ども達のエネルギーに比べると、今の日本の小学校の子ども達は、ちょっと元気が足りないのかな、という気もしましたね。また、ブータンの大学で教育学部の学生たちが真剣に、しかし楽しそうに学んでいた姿も印象深く記憶に残っています。つまり、ブータンの子ども達や学生達にとっては、学ぶことイコール楽しいことなのだ、と実感しました。一緒に行った先生方とは、日本の学校教育の中でそうした感覚をもつことが難しいとしたら、どういう理由なのか、と議論しながら帰ってき



ました。

また、センターからの発信を強化していこうと考えて、当時話題になったフランス発の認知症ケアの技法である「ユマニチュード」について、「こころ塾」という学びのプロジェクトで取り上げました。この技法のことを知ったときには非常に感銘を受け、これは生涯学び続けていこうと思っています。ユマニチュードを日本に紹介した、東京医療センターの本田美和子先生、創設者であるイヴ・ジネスト先生をセンターに招へいし、何度か講演会を行いました。大人気で、そのとき京大病院から参加した看護師さん達は、ユマニチュード推進委員会を看護部で立ち上げて、今も勉強を続けています。

私は今、60代も半ばになりましたが、この4月から新しい職に就き、京都芸術大学で学長の仕事をしています。まず「組織を学ぶ」、「大学にいる人達を知る」、「大学の未来を考える」と、この3つを頭に置きながら、日々仕事をしています。1年生向けの「芸術と心理」の授業も担当しているのですが、オンラインで約600人受講しています。この授業で教えることは、私にとって心理学を再考する良い機会になっています。また、これから芸術について学生さん達と語り合う機会も多くなってくると思い、少しずつそうした分野の勉強を始めています。

そんな中で堀文子さんという画家の本を見つけました。枯れたひまわりを美しく描いた絵が表紙になっています。この絵について、堀さんはこんなふうに書いています。「大地を



見つめる顔は敗北ではなく、その痩せた姿にも解脱の風格があった。その顔いっぱいのは次の生命を宿し充実していた。死が生涯の華々しい収穫の時だということをひまわりから学んだあの日を私は忘れない。」授業の中で学生さんにこの絵を紹介しながら、枯れたひまわりの絵に私がなぜ心を動かされたのかということ語る授業をしました。

これは『華やぐ終焉』という絵です。堀さんは「老残の醜さを見せずに地に還る。落葉の素晴らしさは歳とともに私の心を揺さぶるのだ。秋の落葉の美しさには命の終わりの静けさがある。」と書き、落ち着いた美しい落ち葉の絵を残しています。83歳で乖離性動脈瘤になった堀さんは、研究者が使う本格的な顕微鏡を購入して、ミジンコのような小さい生物を描き始めました。彼女はもう亡くなりましたが、100歳近くまで絵を描き続けて、多くの方が気に留めないようなものをしっかりと見て、美しい作品に残しました。生涯学習のお手本になる方だと思います。

最後に、「学ぶ楽しさと心」について考えてみました。学びに関係するところのはたらきとして、人には「～が知りたい」という欲求があります。これが好奇心で、好奇心が満たされると楽しさの感覚につながると思います。それから「～が出来るようになりたい」という欲求もあります。これは「達成感」につながり、さらにそこから、楽しいという感覚が生まれます。それから「～さんのようになりたい」、「憧れの人に近づきたい」という欲求もあり

ます。これは自己実現であり、究極の「楽しさ」につながる感覚だと思います。それから「自分の知っていることを人に伝えたい」という欲求があります。自分の知っていることを他の人と共有する。これも楽しさの大きな要因になると思います。また、「～をしなければならぬ」という責任感は、それ自体はしんどかったり、ストレスにもなるかもしれませんが、次に「達成感」や達成できた「安心感」につながり、それがさらに「楽しさ」にもなっていくのではないかと思います。



自分のこれまでの学びを改めて振り返って、私にとってあまり楽しくなかった学びは、5歳から15歳まで、親に言われながら続けたピアノの練習でした。でも考えてみると、今でも私はピアノを弾くことができますし、それをこれから楽しみにしていくことができるわけです。そう考えると、学びの価値というのは、学ぶその時々楽しさだけではなくて、後から生まれる学びの楽しさもある、と考えたりしました。つまり学びの価値というのは、あとから振り返った自分の中に、学びの経験が一つの財産として残っている、これは人間ならではの楽しさではないかと思います。

今までの自分自身の学びを振り返ると、仕事として続けていたこともありますし、楽しさを日々感じていたかという、そうでないこともありましたが、自分にとって悪くない経験だった、今の自分から見て楽しい経験だった、と言えるように思います。

そこで今日の結論としては、「全ての学びは楽しい」とまとめたいと思います。ちょっと強引なまとめではありますが、私からのお話はこれで終わります。どうもありがとうございました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

それでは、委員の皆様から34期の会議を振り返っての、ご意見やご感想をいただきたいと思います。また、35期に向けて新テーマや会議の運営方法、社会教育委員の役割、活動内容などに関して、ご意見やご提案があれば、合わせてお願いいたします。

○ 本郷 真紹 副議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

この期で一番印象的だったのは、パンデミックが起こったことです。こういう状況の中で、我々がどういう工夫を展開して、従来から踏襲されてきた、生涯学習をより実りのあるものにしていくのには、どうすべきかということ、考える機会じゃなかったかと思います。我々の予想をはるかに超えるスピードで、AI等の技術が進んでいきます。そういうものと結び付けながら、今の



状況下においても、成果が期待できるような方法を考えていく必要があります。

こういう状況で、改めて人と人との直接のふれあいの大切さを認識しました。そういうことを、市民の皆様方が、それぞれの機会に、実感していただけるような、そういう試み・企画を、今後、我々は総力をあげて、ご提言しないといけないと感じました。

○ 安成 哲三 委員（前総合地球環境学研究所所長）



今、コロナ禍で、リモートやオンラインとなり、このような方法もあったのかと思っています。もちろん、直接ふれあって話をする大切さも感じます。一方で、私は、たった2時間の会議のために、新幹線で東京へ出張することが、多いときは月に3、4回ありました。あの大部分の会議をオンラインでできたと思います。しかし、そのうちの一度くらいは、face to faceで行った方がいいと思います。だから、うまくコンビネーションを考えると、これまで以上に効率的に、お互いに学び合う機会になると思います。このコロナ禍を、V字回復、元に戻すのではなく、新しいモードに入る機会ととらえなくてはいけないと思いました。

私も、誰も目の前にいないところで授業をするのは、やりにくいと思います。いろいろ授業をしましたが、最近の学生は、質問をしないです。大学や授業にもよると思いますが、私の経験で一番、手が挙がるのは小学生です。一番手が挙がらないのは大学生です。ところが、今Zoom等で授業をオンラインですると、チャット機能があり、いろいろなことを言ってきます。face to faceですると、話したがる人間が出てくると、他の人がなんとなく手を挙げにくくなる雰囲気ができますが、シャイで話しにくい人でも、チャットやZoomなら話せるという良い面もあります。また、リモートでは、生徒・学生が話を聞きながら、じっくり考えられるという側面もあると思います。例えば、授業を普段はリモートで行い、2、3回は、face to faceで行う等、両方をうまく組み合わせるのがよいのではないのでしょうか。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

そうですね。新しい教育のシステムが一つ加わった感じはします。人の視線が苦手な学生さんにとっては、Zoomでひとりで聞くというのは、落ち着く環境のようです。マンガ学科の学生達は、似顔絵を描くのが得意なのですが、似顔絵を描こうとすると、モデルの人の顔をじっと見る必要があります。人によっては辛いようです。それをアバターのようなもので描く仕組みを作り、相手の顔を見なくても顔が描ける設備を今準備しているのですが、それがとても人気があると聞いて、びっくりしました。何もなくてもいつかは開発されていた仕組みだとは思いますが、やはりコロナの影響で加速し、新しいやり方が進歩していく時代なのかという気がします。

○ 本郷 真紹 副議長（学校法人立命館理事補佐，立命館大学文学部教授）

オンラインは、お互いに調べあい、意見を交換する場合には、自分の周りに辞書や必要な文献を置いてできます。これは教室ではできないので、オンラインは非常に有益です。そういう便利さもあり、組合せが大事だと思いました。

考えてみれば、2，3年前に最近の学生は個人主義になって空気が読めない，KYと言われましたが、今、オンラインになり，KYは死語になり，空気がないのです。これだけ制約されてくると、人恋しいところがあるのでしょうか、授業を行っていなくても、学生はキャンパスにきます。なぜか知らないですが、長い時間滞留して、人の温かみを求めているのではないかと思います。

○ 柁木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

安成委員のお話をここで聞きし、人が動かないと大気汚染がなくなるということが衝撃的でした。飛行機や、電車や車の排気ガスの排出がストップすることによって、空気がきれいになることはわかりました。



しかし、毎日、「不要不急」、「自粛生活」という言葉がでて、「不要不急」とは何かと考えました。急がない用事の中に、「心の栄養がある」と思います。例えば、旅行に行く、友達と会いご飯を食べる、ライブに行く。確かに、雨風しのげる家があり、最低限、着るもの食べるものがあれば、生きていけるのですが、急がない用事の中に、幸せを感じたり、喜びを感じたり、楽しみがあり、それが、生きがいや張り合いにつながります。そういうことがなくなると、コロナにはならないけども、孤独になる、鬱になる等、私自身そのような時期もありました。

そういう大事なことや、環境問題等の様々な課題がありますが、そのバランスの取り方が、大事だと思いました。

また、私も大学でオンライン授業を行い、パソコン1台で誰もがどこでも学習できるという便利な機能があることがわかりました。オンラインだからチャットで発言できる学生さんもいます。しかし、対面では、その人の目配り、気配り、心配りや思いやりを感じ、会話をすることができます。今、「距離をとって、会話は控えましょう」と言われるので、無意識のうちに人と距離をとり、喋り出さないということが、この1年で定着しています。1回生、2回生は友達ができないので、学生同士でしゃべる、先生に質問することを遠慮しているように感じます。

社会人になると、自分の意見を伝えないといけない場面があり、全部オンラインではすまされないことも出てくると思います。オンラインと行動制限の両方を考えながら、今後、また生活が戻ってほしいと思います。

○ 松岡 直子 委員（京都市小学校長会理事・京都市立祥栄小学校長）

私は、学校の現場と、この場が違う雰囲気なので、少し語弊があるかもしれませんが、ス

トレス解消になっていたと思います。学校では、保護者とは子どもを介しての話になるので、ここでいろいろな立場、仕事の方のお話が聞け、学校とは違う空気感、時間がもてたので、私自身はとても楽しかったです。



吉川先生のお話をお聞きして胸が痛かったのですが、学校現場に勤めている者は、「考えなさい」という強制的なことではなく、子ども達からの「学びたい」「考えたい」という要求を大事にしながら授業を進めているのだろうか、と思いながらお話を聞いていました。

「これからの時代を生き抜いていく」。「生きていく」ではなく、「生き抜いて」いかなければならない。コロナ等いろいろ大きなことがある中で、たくましく生き抜いていく力を、子ども達につけていくのには、何が大事だろうかと考えました。

一つは「子ども自身が気づけない良さ」に気付いてあげること、それを先生をはじめ友達に「認めてもらう」ことが大事です。そのためにはオンラインでは無理だと思います。同じ空間で、その子をよく見てみないとみつからない良さがあります。そういうことを教師が伝えていく。「自分自身でも気付いていない良さに気づき、それ大事にしながら生きていく」ということが、これからの時代を生き抜いていく子ども達にとって、力になると思います。

2つ目は、「いろいろな考えにふれさせて、いろいろな考えに気付かせる」そういう場をつくっていくことが必要です。固執してしまうことで病気にもなったり、場合によっては自殺につながったりします。いろいろな人がいて、いろいろな考えにふれさせる、そういう場づくりを学校でしていかないといけません。GIGAが最優先して、「GIGAを使えるようにしたらいいんじゃないよ。」と学校の教職員にも言っています。大事なことを忘れてはいけない、学校も変わっていかないといけないと思います。

これからの時代を生き抜いていく子ども達を育てるのに、社会教育委員になり、いろいろな方の意見を聞いたことは、学校長としても、私にとっても有意義な時間でした。ありがとうございました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

今、先生をしている方達に、ぜひ今のお話を伝えていただけるといいと思いました。毎日、子どもと接する先生達に、松岡先生のお考えを伝えと、とても励まされるような気がします。

○ 櫻井 寿美 委員（市民公募委員）

『ブータン』という映画の中に、あのような景色が出てきます。現代社会の若者と、電気も通ってないブータンの子ども達とのふれあいで、現代社会にまみれている学生が、変わっていくというストーリーです。純粋に「学びたい」という子ども達が、今の日本の小学校でみられないのかと考えながら、映画を見ました。

私は今、高齢のお客様が多い店をしています。先日、91歳のお客様がおひとりで、おみえになりました。その方とお話をしていると、87歳の時に洋裁を始め、その日も、自分で作ったお洋服を着て来られていました。それから80歳で書道をはじめ、今、展示会に出してるのよ、とお話をされました。まさに、生涯学習のお手本のような方だと思いました。その方とお話していると、自分のお歳は一切感じられない、もちろん実年齢は感じておられるとは思いますが、「何歳だから」、「人がどう思っているか」は、お話の中からは感じられませんでした。

人は「一生学びたい」という気持ちは、一生続くと思います。

3月に107歳で亡くなられた書家の篠田桃紅^{しのだとうこう}さんが、「最後まで夢中になれるものがあるれば、人はいくつになっても楽しい」、「学ぶというのは自分の生きている上での養分である」と、著書の中で書かれていました。「何かしたい、学びたい、楽しいことしたい」と思った時に、すぐにアクセスできる環境づくりをすることが、行政の役割なのかと考えながら、お客様とお話ししていました。

人はいくつからでも学べるし、死ぬ寸前まで学びたいと思える動物なので、それを支えられるように、新しいICTの技術や、行政のサポートによって、それが実現できるような世の中にしていけないといけないと感じました。ありがとうございました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

高齢の方が学ぶ姿を見ていると、見ている方も励まされる気がします。また、楽しそうにやりとりしているのを見ると、こちらが嬉しくなります。「学ぶ楽しさ」は、学ぶ姿を見ている人達も楽しくなっていくという連鎖反応がある気がします。

○ 森 清頭 委員（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

今期を振り返ると、コロナの前と後で大きく変わっていく期であった印象があります。また、いろいろな先生方のお話を聞かせていただき、私の学びにもなり、そしてそれぞれの分野の問題、展望を知ることで、生涯学習、教育の問題にどう関わっていくかを具体的に考えることができ、ありがたい機会でした。

コロナ禍において、デジタル化が一気に進みましたが、結局、デジタルはあくまでも手段であって、それをどう使うのかということが議論されていかなければならないのではないかと思います。

私は、大学の授業で、誰もいない会議室でパソコンに向かい、90分2コマをしゃべり続けることがあります。このコロナで約1年半経ちましたが、対面・非対面のメリット・デメリット等を改めて振り返っていく、そして子どもの教育においては、対面で、ふれあって、連続的に見ていく中での変化を感じることも大事なことです。



パソコンでは、入室・退室のボタン一つで現れて消えていきます。知り合いのカウンセラーは、Zoom でクライアントと話する時に、顔は見るけれども、部屋に入って出ていくまでの仕草等が見えないので、毎週会っていても、情報が得にくいと言っていました。逆に、クライアントの方は喋りやすくなったと言われるそうで、見透かされている感がなくなるようです。

今、フランスの知り合いに聞くと、「マスクを取ってもいい生活がもうすぐ始まる」と言い、日常生活に戻りつつあるようです。しかし、「それはコロナの前のような生活ですか」と聞くと、やはり「それはコロナを経験した上での生活なので、少し感覚は違う」と言っておりました。

おそらく画面上から対面へと、実際に会える日がくると思うのですが、一方で会議はリモートで行った方が移動距離がなくてよいということもあります。

先ほどの吉川先生のお話にもありました「学ぶことの楽しさ」を大前提とした中で、これから先においては、デジタルを併用していく社会の中で、どういう使い方があるのか、利点、デメリットを理解し、それが教育の場や学びの場でどのように反映していけるのかと、戦略と戦術を分けて考えていく必要があると感じました。ありがとうございます。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

コロナの一番の特徴は、全世界が影響を受けているというところが、今までにないことだと思います。津波や戦争など、どこかの地域だけの問題ということが今まで多かったです。コロナは本当にグローバルな問題だったので、日本の少し遅れている部分等がよく見えてきました。

○ 大澤 彰久 委員（平成30年度京都市PTA 連絡協議会会長）



吉川先生、先ほどは貴重なお話ありがとうございました。自分に子どもが、大学生2人と中学生が1人います。学校が休みの時期は、朝も起きてこず、家でゴロゴロして生活のリズムが乱れていました。学校が始まると、やはり朝起きてきちんと出ていきますし、何より朝起きた顔がいいです。みんなと会える、人と触れ合えるという楽しさを実感しながら学校に行っていますし、生活リズムもできていると感じています。

僕もこれまでは会議や付き合いで、家に帰るのが遅くなり、子ども達が出迎えてくれることが多かったのですが、コロナの影響で、今は子どもがアルバイトや塾に行き、僕が仕事から早く帰って子ども達を出迎えるという逆転現象が起こっています。子どもと「今日どうやった？」と会話ができるのが、コロナのおかげで良いことがあったなと感じています。

やはり人との触れ合いが少なくなったということで、地域の役員をしている年配の方にお会いすると、楽しそうに、嬉しそうに喋られます。話はそれますが、新聞記事で「住みたいまちランキング」の「そこを選ぶ理由」の問いに対し、「人との触れ合いが少ない地域が

いい」ということで選んでいるという記事が出てました。寂しい傾向だなと感じています。

私もこの社会教育委員として会議に参加し、いろいろな学びや知見をいただきました。我々世代が、仕事が忙しいから人と付き合いを避けるとか、子どものことと置いていてもPTA活動に参加できない、ということもあり、PTA活動を見直していこうという話もありましたが、コロナによってなかなか活動できず、活動が変わったり、なくなっています。保護者としては「なくなって良かった」と思う人もいます。

ただ、コロナワクチンを接種して、また人と触れ合う機会が多くなると思うのですが、ここで「なくなったから、なくしてもいい」ということではなく、また違った形で「子ども達のために何ができるのか」ということを改めて考えていかないといけない。「コロナでなくなって良かった」だけでなく、子ども達に還元できる活動、親にも負担にならないような活動の仕方を考えていかないといけないと感じているところです。

ここで得られた経験や知見を我々親世代に広げていけたらいいなと考えております。本当に2年間お世話になりました。ありがとうございました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

お父さんに迎えられると子どもさんも普段と違って新鮮でしょうね。選択肢が増える感じがします。コロナで新しい組み合わせや可能性が広がり、アフターコロナになった時は、「はたしてどういう形が一番良い姿なのか」ともう一回考え直すきっかけになりそうな気がします。

○ 園部 晋吾 委員（NPO法人日本料理アカデミー理事（地域食育委員会委員長）、山ばな平八茶屋主人）

2年間本当にありがとうございました。生涯学習について考えさせていただき、いろんなことを話し合いました。先ほど、先生のお話で「学ぶ楽しさ」や「教育」等、いろいろな観点がありますが、私は、「教育」と「学び」は似ていますが、少し違うという印象を持っています。

先ほど、松岡先生が「〇〇しなさいと学校で言うてしまう」とおっしゃっていましたが、これは「教育」だと思います。教育というのはある程度〇×という正解・不正解があり、〇になるように子ども達を向けていくというのが教育の一つだと私自身は思っています。



私達がしている「食育」は、「教育にならないようにしよう」と言っています。子ども達に「これが正しくて、これが間違いですよ」と比較しないようにしよう。実は、「食育」を始めた時に、学校の先生から、「一つは化学調味料で味を付けて、一つは出汁で味を付けて、子ども達に飲み比べをさせてみては」という話が出てきました。でも、「そのようなことをしたら、化学調味料の方がみんな美味しいと言いますよ」「そこから何を導き出したいんですか」という話をしていきました。どうしても「こちらが正しいからこちらに導きたい」と

いう思いがとても強いのです。

我々は、そういうことではなく、子ども達に「伝える」ことをしていこうと考えています。自分達は、「こういう出汁の取り方をして、こんな味がするんですよ。」と子ども達に伝えていく。そこで「あ、こんな出汁もあるんだ」、「意外と美味しいな」、「昆布出汁は不味いな」と、子ども達に驚きと感動と、気付きのきっかけを与えられたらいいなと思っています。「好みの方はどれくらいいますか」と聞いたときに、昆布出汁が好みの子はほとんどいません。「味が薄い」、「味がしない」と言います。そういう意見が出てきた時に、「そうなんや」と全部聞きます。「そこに鰹節を足したらどうなりますか」と言って、どんどん味を変えていくことにより、子ども達はいろいろなことに気付いていきます。そういう気付きのきっかけを与えることが、我々のしている「食育」で、「教育」ではなくて、どちらかという「学び」に近い方かと思えます。

先ほどの学びという話で、先生が学ぶ楽しさを5項目挙げてくださりました。達成感や、知りたいという欲求等を挙げていただき、それが満たされたら、楽しいのです。逆説的に言うと、それが満たされなかったら楽しくないのです。ですので、私は、あの項目が全部いる必要はないと思います。何か一つ、例えば達成感が得られたということ子ども達に感じてもらったら、そこから楽しみに変わると思えますし、知りたいという欲求が満たされるということで、そこから楽しみに変わると思えます。私自身は、その楽しみに変わるきっかけを子ども達に与えていき、きっかけの一つでもスイッチが入れられればいいなと思っています。そういう意味では先ほどのお話は理路整然とお話されていて、わかりやすかったですし、それが一つの観点かなと思います。

私は、「生涯学習」は、子ども達の「教育」とは、違うと思います。これはどちらかという「学びたい、知りたい」という欲求を満たされる方の一つの手助けになればいいなと思っています。だから「学びたい」と思うときに、すぐにそこに手が届く、アクセスできる機会を作っていくことが生涯学習だと思っています。

学校教育の中でも、一つは「教育」という「こうしなさい、〇×というもの」が必要だと思えますが、もう一つそれ以外の時間で、子ども達に考えさせたり、気付かせたりするきっかけの時間というのを明確に併存させていくことは、大事だと思います。そうすることによって、どちらかに偏るのではなく、これは「教育」、これは「学びで気付かせる」ということを先生の頭の中で切り替えて、伝えていけたら、授業が子ども達にとって幅広く学びにつながるのではないかという気がしました。

また、先ほどリモートを使っただけの学習機会が増えるというお話があり、確かにそうだと思います。例えば、チャットにすることで、質問が多く出てきたこともありました。「そんなこと聞いたら恥ずかしい」と思うと手が拳がらなくなってしまいましたが、チャットでは聞くことができるということがありました。

「顔を描くのに顔を見つめなくてもいいシステムを導入し、人気がある」という話が出た時に、私はこれはどうなのかと思いました。

教育の根本にあるのは、やはり「生きる力を身に付けさせること」だと思っています。生きる力というのは様々ですし、正解がありません。最近、携帯電話やスマホが普及してきて、

企業の新入社員の中で電話をとるのがストレスだという人達が増えてきたと聞きます。誰からかかってくるかわからない電話をとるのが嫌だというストレスがあるそうです。昔は家庭電話で、皆が誰でも出てたわけで、それがなくなったことによって、見ず知らずの人と話すことへの恐怖というのが今あるそうで、社会の中で生活をしていくうちに、そんなことでいいのかなと思ったりもします。本当にそういうことが苦手なら、パソコンに向かって仕事をするような特化した仕事もありですし、社会生活の中で多くの人がいる中で生活していくこともありで、いろいろな選択肢があっていいと思うのですが、その選択肢を上手く選べるような導き方をしていくということも大事だという気がしました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

ありがとうございます。「気付きの時間」は大事ですね。考えてきちんとわかるまでには時間が必要なのですが、どんどん「早く、効率的に、短い時間で」となって、いろいろなことを詰め込んでいきます。それが良いことのような錯覚を私達は持ってきたのではないかと思います。

ブータンに行って衝撃を受けたのはそこです。時間をあまり気にせずに、一人一人の中に流れる時間で生きている。そこが羨ましくて、それはもちろん日本のような社会では難しいのですが、「あのような生き方もある」ということを頭の隅に入れておくだけで、何かチャンスがきた時には切り替えられます。「ここはゆったりしておこう」とか、「これでいいんじゃない？」とゆとりを自覚的に持つことが必要な気がします。日本は几帳面で「きちんとする」が好きな国民ですから、それをもう少し緩めるという発想が、教育の中にあるといいと思います。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

私は、労働組合の代表として、ここに来させてもらっております。労働組合は、企業で様々な働き方をされている方の集まりです。経営や働き方等については意見交換ができますが、伝統文化や環境問題等のお話を聞く機会がなかったので、こういった場で気付きを与えて



もらいました。私自身も勉強になり、ありがとうございました。

この2年間は、コロナ禍で大きく様々なことが進んでいきました。このスピードは衰えないと思います。Webで開催することについては、メリット・デメリットがありますが、融合した形の「ハイブリッド型」がよいのではないかと思います。「ハイブリッド型」であれば、行けない方はWeb参加ができますので、良いところをとり、次に全員参加型に繋げていくことができるのではないのでしょうか。

Web会議で全員参加がしやすくなりましたが、会議頻度が増え、これはデメリットです。しかし、全国からタイムリーな情報を集めやすいので、それが上手くいくようであれば、Web会議もよいですし、今後どうなっていくのかと思います。

今、コロナ禍でテレワークが進んできていますが、これがコロナ禍でなくなった時にどう

なっていくのか。間違いなく、働き方やスピードが変わってきますので、様々なことが変わります。そこを私達は5年後、10年後を見据えて、どういった形で、会社あるいは若い世代の方々に伝えていけばよいのかと考えたときに、55歳、60歳を過ぎて、第2の人生を含め「生涯学習をしていきましょう」と言われますが、私達は「20代、30代で生涯学習をしてほしい」とお願いしています。

まずは会社に就職し、安定して働くことが大事です。そこを大事にしながら、違うことについて、時間を作って学び、それが将来にいきる、あるいは第2第3の現実を生きるということだと思えます。

今は右肩上がりの時代ではありませんので、日本も大変厳しい状況が起こっています。今までは、会社でスキルアップし、一人二役三役とこなしてきました。これからはスキルチェンジで、人が足りていない社会の困っているところ、そこに余った時間がある時に、社会を助けるということです。そういうことにも興味を持ってやってほしい。これは強制ではありません。本人が目指してできる、そのための勉強にお金がかかる場合は、できるだけお金を安く、敷居を低くし、学べる場を作っていただければありがたいと思います。これからの生涯学習のあり方について、しっかり話をして、進めていけたらなと思っています。

また、私達は、小学校・中学校・高校と、京都で学びますので、京都ならではの伝統文化を体感できたら一番良いと思います。今、祇園祭が中止される等、伝統文化が体感できませんが、それを何らかの方法で行い、「京都」をキーワードに京都の良さを伝える教育ができるようになればいいと思います。

もう一つは、世界でもそうですが、日本で学べない状況にある人にも学んでいただいて、格差を起こさないことも大切です。SDGsの考え方をベースにして、生涯学習をどうしていくのか、考えていただくとありがたいです。

コロナ禍で困っている方がたくさんいます。学生で奨学金、お金がない、アルバイトがクビになり収入がない等の労働相談を受けています。それにできるだけ対応しておりますが、今、一番困っていることは、「相談するところがわからない。」ということです。ネットでいろいろな情報が出てきますが、不確かな情報もありますので、それが正しいことなのかどうかをきちんと答えられるような相談窓口が必要です。

我々も努力し、相談窓口を周知して、「困ったことがあれば電話してください。」と言っています。私も大学で講義をしており、失礼な言い方もわかりませんが、「悩んだ時があったら自殺を考えず、とにかく相談してください。」と言っています。身近に「悩み、命を絶とうと思っている方がいる」と考えてやった方がいいと思っています。こういった時代なのでいろいろな相談の場が必要だと思えます。

最後に、この2年間で伝える楽しさを知りました。ここで得たものを組織で落とし込み、一人でも多くの方に伝えていくことが、私の責任だと思っています。ありがとうございました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

昔は、近所の人や昔の同級生等、相談できる相手を何人か持ってたような気がしますが、最近はそのような人がなかなか見つかりにくくなっている気がします。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）

私も初めて34期に参加させていただき、皆様、教育や生涯学習について深く考えていらっしゃるということを知り、感銘を受けました。

私は新聞社に勤務しており、職業柄、中学生の作文の審査をすることがあります。驚くのは、中学生が自分のこと、社会問題について深く考えているということです。人権やいじめの問題、家族・友達が病気になった、あるいはおじいちゃんおばあちゃんの介護、多岐にわたるテーマで書いています。原稿用紙6枚くらいの文章ですが、論理に破綻なく書いている。非常にびっくりします。こういう子がいる限り日本は大丈夫だ、と思います。ある女子中学生は出生前診断について自分の意見を展開していました。そういう作文をみると、中学生も自分の事、身の回りのことについて非常に深く考えているということに気付かされます。



社会教育というと、これは学校も含めるのかもしれませんが、学校の外で子どもとどうするかということを考える印象がありますが、学校しか知らない中学生でも深く物事を考えている、ということを考えさせられました。

皆さんのお話の中に、このコロナの影響でリモートの授業も広がり、状況が変わっているとありました。その中で多くの方がリモートでやることにより、話がしやすくなったというお話を聞きました。私もそのように思っています。リモートでは、自分の実像が見られずすみずみ。虚像を見て、そして自分の虚像が相手に映っているというある種の安心感があり、リモートの方が利用しやすいと思っている方が多いのではないかと思います。しかし、こういうことが普及していくと、インターネットの世界に入り込んで、ネットの発信者が本音で言っているのか、あるいはおちょくって言っているのか、その辺がよくわからないまま自分に近い考えを信じ込んでしまう、という恐れが指摘されています。「エコーチェンバー」と言い、自分と同じ考えがエコーのように共鳴して、それがあたかも真実であるかのように受け取ってしまうということが、今、問題になっています。そういう状況のなかで、世の中で自分と同じ考えの人としか付き合わなくなり、自分と考えが違うことをなかなか受け入れなくなることがあります。世の中を「白か黒かでしか判断しない」、「0か100でしか見ない」ということが問題になっていると思います。

先ほど、松岡先生のお話にもありましたように、いろいろな考えがあるということを経験の現場で教えるということも、これからさらに重要になっていくと思っています。そんな中であっても、子どもは子どもなりに深く考えるところがあるんだということで、このコロナに始まったリモートの世界について、使うためだけではなくて、リモートが持っているメリット・デメリット、これをきちんと教えていくということが必要なのではないかと感じてお

ります。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

私も中学生というと、14、15歳で深いことを人間は考えられるんだと、アンネの日記のことを考えます。彼女が特別なのではなく、あの世代の子達の頭の中にはあのような深い思考ができるだけのものが揃っているわけです。それがどういう環境の中で深く育っていくのかというところは、教育する側として考えないといけない気がします。思考が浅くなっているのだとしたら、それは本人のせいではなく、環境の影響が大きいのではないかという気がしています。ありがとうございました。

それでは、本日ご欠席の田村委員からのメッセージを紹介させていただきます。

○ 田村 毬絵 委員（市民公募委員）※ご欠席

「最後の社会教育委員会議に参加できず、本当に申し訳ありません。大学院生の2年間で京都市の社会教育について学んだことを今後の教師生活にいかし、学校だけではなく、社会から学校の役割を考えられる教員になれるよう、務めていきたいと思えます。ありがとうございました。京都市立京都御池中学校 田村毬絵」

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学学長）

2年間議長をさせていただき、委員の皆様のご意見を聞かせていただく貴重な時間でした。これだけ多様なバックグラウンドのメンバーが一堂に会するのは難しいことです。委員の皆さんにじっくりお話をさせていただこうと思いながら務めてきましたが、つい自分がしゃべってしまったり、司会者として十分でなかったこともあったかもしれません。

私は委員の皆さんのディスカッションに、京都市政を担当している皆さんにも加わってほしいと思っていました。ですが、時間の関係でなかなか実現できませんでした。社会教育委員会議の大事な機能は、委員の皆さんのご意見を京都市の行政の方に吸い上げていただき、活かしていくことだと思います。その点については、事務局が委員の皆さんにフィードバックをしようという工夫してくださっているのを感じていました。ありがとうございました。



社会教育委員会議の役割は、議論が委員会の中だけで終わるのではなく、社会に還元されていくところまでだと思っています。次期の社会教育委員会議でも、活発なディスカッションを大事にし、継続して議論をしていただくことを願っています。どうもありがとうございました。

それではこれで協議は終了します。では議事2の「はばたけ未来へ京プラン 2025」について事務局から説明をお願いします。

■ 議事（2）京都市基本計画「はばたけ未来へ！京プラン2025」について

京都市では政策を進めるにあたり、「はばたけ未来へ！京（みやこ）プラン」を策定し、様々な取組を進めています。10年間の計画が、昨年度で終了し、今年度から5年間の新たな計画を策定しました。23ページ・24ページに、「生涯学習」が掲載されています。内容は既にご説明していますので省略しますが、これまでの計画を踏襲しつつ、「人生100年時代」が大きなキーワードとして入っています。

また、「誰一人取り残さない」というSDGsの観点から、「障害のある人」という文言やオリンピック・パラリンピックも踏まえ、文化芸術と並んで「スポーツに親しむ機会」という文言も追加されています。

また、具体的な事業計画の中では、コロナによるオンラインなども踏まえ、「ICT（情報通信技術）も活用しながら」という文言も追加しています。

この新しい「京都市基本計画」を、生涯学習の基本指針とし、社会教育委員会議でいただきましたご意見も踏まえながら、これからの生涯学習を進めていくことを皆様と共に確認したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

■ 報告「令和3年度指定都市社会教育委員連絡協議会（大阪市）」

■ 主催事業及び刊行物の案内

■ 閉会（吉川議長）

■ 閉会挨拶（的山生涯学習部長）

